

エマ・ゲイトウッドは、アメリカ3大トレイルの一つ、全長5500kmのアパラチアン・トレイルを一人で歩きおした、初めての女性です。

1955年の春、67歳になったエマは、「世界で一番長い自然歩道」とよばれるアパラチアン・トレイルをめざして、旅に出ました。荷物はあるだけ軽くして、木イチゴの実を食べ、川のせせらぎから水のみ、枯れ葉のベッドで眠ります。

アパラチアン・トレイルは、アメリカの14の州にまたがる山道です。北へすすむにつれ、新聞や雑誌にとりあげられるようになり、やがて国じゅうの人たちはどうして「エマおばあちゃん」がそんな長い距離を、たったひとりで歩きとおそうと思ったのか、知たがるようになりました。

「やってみただけだよ」と答えたエマおばあちゃん。いくつになっても、人生を楽しむこと。夢にむかってチャレンジすることの大切さが伝わってくるお話です。

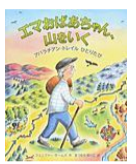
(看護福祉専門学校図書室司書 まちちゃん)

わたしを 育ててくれた人たち



忘れられない人がいます。その人は、いつも私の名前を呼びながら両手いっぱい抱きしめてくれた祖父です。祖父は早くに脳梗塞にかかり、私が4歳の時に亡くなりました。母の実家に尋ねると、父の肩から降り、そのカー一杯広げられた祖父の両腕まで、まっしぐらに駆けていったのは、まだ歩けるようになり出した一歳半ごろの思い出。私の名前を呼んでくれた、か細くて温かかった祖父の声は今でも覚えていています。この『はぐ』という絵本は互いに名前を呼び合い、かたい「はぐ」をします。祖父との思い出は、この「はぐ」だけです。だけど人生のさまざまな場面、励まし慰めてくれた今の「わたし」を育ててくれました。イラストレーター佐々木マキのシンプルなお線。シンプルだからこそ直球で伝わってくる。是非、お孫さんに読んであげたい「はぐ」をしてみてください。それだけでいいんです。

(牧野図書館司書 ほりちゃん)



『エマおばあちゃん、山をいく アパラチアン・トレイル ひとりたび』
ジェニファー・サムズ 作・絵
まつむら ゆりこ 訳 廣済堂あかつき

ふたりのエマ それぞれの生き方



『エマおばあちゃん』
ウェンディ・ケッセルマン 作
バーバラ・クーニー 絵
もきかすこ 訳 徳間書店

さて、こちらのエマは、エマ・ゲイトウッドのように実在した人物のエピソードではなくフィクションです。

エマおばあちゃんが好きなのは、戸口にふきよせられた雪をみたり、のんびりとくつろいで、おいとおい故郷の小さな村を夢見たりとかざらないことでした。そんな日常の中でも、寂しさを感じることはありません。そこで、72歳になった時「あたしの おほえていいる」とおりの えを かこう」と決心します。

エマおばあちゃんが描いた絵はとも素直で、愛した時間の思い出の1場面が描かれています。絵に記されたローマ字のEMMAという名前に気が付いたとき、これがエマおばあちゃんのおぼえの風景なのだと歳を重ねたからこそ浮き立ってくるその人らしさにしみじみしました。画家であるバーバラ・クーニーの深みのある色使いと、穏やかな静けさを感じてみてください。

(牧野図書館司書 ほりちゃん)

T先生へ



私は女学校時代、あなたの地理の授業を受けていた生徒です。あなたの授業といったら「黒板には何もかかん」といって、教科書に沿った授業ではなく、地図帳の地名に線を引かせて外国のお話をひたすらノートに書くスタイル。白髪まじりでもプリプリ怒っているおじいさんのあなたは、温室育ちの多くの女子生徒にはエキセントリックな存在でした。だけど気が付いていました。女子学生から裏で『ツツクン』という愛称で呼ばれていたことを。そして、わたしも、そう呼ばせていたこと。あなたとは、ひとつも言葉が交わすことはなかったけれど、あなたが話す外国のお話はとても好きでした。その『マドレンカ』という絵本の絵のように、外国がともミステリアスで夢いっぱい未知の場所のようにワクワクしたものでした。社会人になってからの私はフランス、エジプトとメキシコにインドネシアなど様々な国を旅行し、帰国する度にひとつ未知に飛び込んだ、成長の喜びがありました。あなたの授業が、私の人生を彩ってくれていきます。そしてさらに今、図書館員になってくださった人の未知に寄り添う仕事をしています。ツツクン！お元気になっていますか。今の私ならたたくさんのお話ができそうです！
この『マドレンカ』を抱えて。

(牧野図書館司書 ほりちゃん)

私の両親は、私や、孫である私の子ども達に手紙をよく送ってくれます。旅先からは絵葉書もよく届きました。先日、20年前！の娘の誕生日に両親から届いた誕生日カードが出てきてびっくり。封筒を開けると、当時のことがいろいろ思い出されて、懐かしい気持ちになりました。メールやラインは便利だけれど、手紙にしかない良さもたくさんありますよね。というわけで「手紙」の絵本、集めてみました。(中高図書室司書 サカモン)

時を越えてつながるもの...



『ただのしろいふうとう』
殿内真帆 作・絵
福音館書店

女の子がポストに投函した、白い封筒。いろんな形、綺麗な色や柄の封筒たちの中、白無地で四角くて、何の取り柄もない「ただのしろいふうとう」はいじけてしまっています。

でもね。この封筒が運んでいたのは……

私は小学生の頃、海外にいました。ネットなどなかった時代です。日本の友達との「文通」がとても楽しみでした。手紙を届けるには、封筒に住所も書かなきゃいけないし、切手も貼らなきゃいけない。着くまでに何日もかかります。返事が来るのが楽しみで、毎日ポストを覗いていたっけ……

そして、封筒だって立派に手紙の一部だということ、忘れてはいけません。ハサミで切って、封筒を開けて、便箋を出して、開く瞬間のワクワク！メールにはない楽しみですね。



『ゆうびんやさん おねがいね』
サンドラ・ホーニグ 作 絵
パレリー・ゴルパチョフ 訳
なかがわちひろ 訳 徳間書店

郵便では今や、たいていのモノが送れます。では、封筒に入らない「形のないモノ」は、どうやって送るのでしょうか？

コフタクン、おばあちゃんのお誕生日にとびきり素敵なプレゼントを思いつきました。そのプレゼントとは？

なんとコフタクンのプレゼントを届けてあげようとして、ゆうびんやさん達は活躍！郵便リレーに協力すると……あら不思議？みんな笑顔でハッピーになっちゃいますよ。

プレゼントは無事におばあちゃんのもとに届くのでしょっか？おばあちゃん、返信はいつするのかしら？

娘が大学生の時、下宿先に実家の母が時々手紙を送ってくれていました。ポストで封筒を見ると、筆跡でおばあちゃんからだとわかって、嬉しかったそうです。筆跡と筆跡に乗せた「気持ち」を感じるの、手書きならではのですね。母も、娘が好きそうな記念切手を選ぶのが楽しかったそうですよ。



『はるとあき』
斎藤倫 作
うきまる 絵
吉田尚令 絵 小学館

春は秋を知りません。秋も春を知りません。

春は夏に、秋への手紙を、秋は冬に、春への手紙を託して、お互いを知ろうとする、はるとあき。

「わたしたち、おなじものをみてるのにこんなにちがうんだ」

2人のやりとりを読んでみると、あらためて、日本の四季に感謝したくなります。

この絵本を「大人のおはなし会」で読んだ時には、終わってから、絵本を手にとって一人でゆっくり読んでいる方がいらっしやいました。

年を重ねたからこそ、あらためて感じる自然の美しさがありますよね。

「四季折々のたより」という言葉は、季節の移ろいを感じる感性と、それを表現できる豊かな日本語があつてこそ、これからもずっと、大切にしたいと思っています。

会いたい人に会えない今、その人のことを想いながら、ゆっくりのんびり、手紙を書いてみませんか？



絵本専門士

マトリョーシカ シスターズの

絵本で

ホッと新聞

季節は秋をむかえ過ぎやすい時期になりました。さて、みなさんは、私たち絵本専門士についてご存じでしょうか。絵本専門士とは、文部科学省に認められた、絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家です。つまりは、絵本を世の中に広める伝道師として、どんな方にも絵本を楽しんでいただきたいそんな気持ちで活動しています。今回は十月三十一日(月)に牧野図書館で行う私たちの初めての絵本活動、『シニアにむけたおはなし会』にちなんで、シニアの方にホッとしたいだけの絵本新聞を作成しました。お楽しみください。

季節の絵本

「くるみのなかには なにがある?」との問いかけに、「ゆらしてごらん」「みつけてごらん」と、くるみの中のちいさなちいさな世界へと誘われて(いびきなわらわて)いきます。

「シヤリン、チリン」といい音がするの、カエルのちいさなだからもの。りすが隠したくるみには、りすの裁縫箱が。そして小さなドアがついているのは、「ちいさなちいさなおじいさんとちいさなちいさなおばあさんのいえ」。耳にあてると、ゆきがつもるまちのかねの音が聞こえてくる、くるみのなかの小さな宇宙。

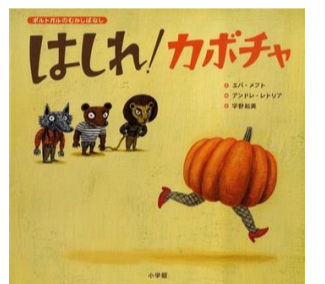


『くるみのなかには』
たかお ゆうこ 作・絵
講談社

(看護福祉専門学校図書室司書 まとちゃん)

切り抜いた絵を「カラーシユ」にした小さなくるみの中に広がる様々な物語に想いをはせると、いつの間にかくるみの中の住人になれそうな気がします。

「くるみのなかには なにがある?」のせて みみをすませて「・・・ほら、くるみのなかの住人たちの物語が聞こえてくるでしょう?」



『はしれ!カボチャ』
エバ・メフト 著
アンドレ・レトリア 絵
宇野和美 訳 小学館

ハロウィンの読み聞かせに最適なポルトガルのむかしばなしです。

孫娘の結婚式に喜んで出掛けて行くおばあさん。途中でおばあさんを食べようとする恐ろしい動物たちと出くわすものの、機転を利かせて難を逃れ、無事孫娘の家にたどり着きました。結婚式が終わって帰る時、孫娘の知恵でカボチャになって家路を急ぎます。その姿が滑稽で笑えますが、もちろんおばあさんは大真面目です。帰り道でおばあさんを待ち構えていた動物たちとは、ひょうきんで肝っ玉の座った掛け合いでかわし、見事家に帰り着くことができたのでした。

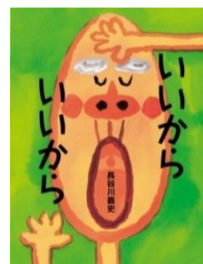
とにかく絵のインパクトが大きくて、力強いタッチに加えて愉快な表情と言葉のリズムが魅力的な絵本です。ひとりでもたくましく生き抜く強さは、人生のお手本にしたいと思います。そして、わたしも孫娘の結婚式にどこへでも駆け付けられるようなパワフルなおばあちゃんになろうと心に誓いました。

(こども育児セラピスト まさみ)



藤井寺市出身の絵本作家 長谷川義史さんの喜劇のように楽しい絵本。シリーズ5冊通して、それぞれの作品でカミナリや貧乏神、ゆづれい、忍者、宇宙人といった、ちょっと迷惑な訪問者がやって来ます。表紙に描かれたおじいちゃん、相手を選ばず招き入れ、またどんな災難に遭おうとも「いいから いいから」と受け入れます。時に悩みに耳を傾け励ましたりしながら、小さなことにこだわらないおらかさとやさしさ、誰に対しても変わらない懐の深さに、みんな心を開いて、どんな問題も解決してしまうのです。このおじいちゃんのようなゆるさと寛大さは人として大いに見習いたいところ。『おじいちゃん』の読み聞かせ絵本として、ぜひお孫さんや周りの子ども達に読んで差し上げてくださーいね。

(こども育児セラピスト まさみ)



『いいからいいから』
長谷川 義史 作・絵
絵本館

いいから



『だってだってのおばあさん』
さの ようこ 作・絵
フレーベル館

癖

だってだって...と年齢を言い訳に自分の行動を制限しているおばあさんのおはなしです。アクシデントで99歳の誕生日に5本のろうそくを立ててお祝いしたことをきっかけに、気持ちの5歳の子どもになりました! 実際には、何も変化はしておらず、ただおばあさんの「意識」が変わっただけのことなのですが... おばあさんは、それまで年齢を理由にやらなかった「つり」にもチャレンジします。

(看護福祉専門学校図書室司書 まとちゃん)

この絵本を読んで、サミュエル・ウルマンの詩と重なりました。「青春とは人生のある時期ではなく、心の持ち方を言う」と。いくつになっても好奇心のまま行動することで生き生きと楽しく元気でいられることを思い出させてくれる絵本です。すべて、本人の意識次第で行動を変えられるということですね。わたしも、自分の年齢のことはもう忘れて、様々なことにチャレンジしようと思います。

(こども育児セラピスト まさみ)

懐かしの場所



『おふろやさん』
西村 繁男 作・絵
福音館書店

あっちゃん家族と一緒に おふろやさんに出かけました。下駄箱にくつを入れて、脱衣所へ。服を脱いでお風呂場に入ると、おせいの人が賑わっています。湯船の上の富士山と松林の絵。あっちゃん友だちと遊んだり、湯船で騒ぎすぎて怒られる若い人たちなど、たくさんの方がくつろぐ様子が絵で語られます。

私が子どもの頃には近所に必ずおふろやさんがありました。家にもお風呂がありました。家にもお風呂がありました。たが、時々連れて行ってもらうおふろやさんがとても楽しかったです。お風呂あがりに飲むコーヒー牛乳やフルーツ牛乳が特別に美味しく感じられました。とても懐かしく今でも時々飲みたくなる思い出の味です。



イベント案内

『絵本専門士グループマトリョーシカシスターズシニアにむけたおはなし会』
場所: 牧野図書館 第一集会所
日時: 十月三十一日(月) 14時~15時
対象: どなたでも
定員: 先着十五名 当日会場へ
問合せ: 050-7102-3121
牧野図書館まで